

地域循環型コミュニティの実現

1 目的・概要

本プロジェクトでは、京都市の「人」と「特産品」を結び付けた「地域循環型コミュニティ」の創造を目指します。そこで、京都市内で同志社大学の今出川校地の位置する上京区を活動の主なターゲットに決めました。プロジェクトの主な目的として以下の三点を掲げ、一年間の活動を行いました。

まず、一点目に「地産地消商品の開発」を目的としています。

上京区で生産されている食材を使用してスイーツを開発します。そのスイーツを上京区内の施設で販売することで地産地消の実現を目指しました。

二点目の目的は、「商品開発に伴う地域雇用の創出」が挙げられます。スイーツの製造現場では社会的弱者（精神・知的障がい者等）を雇用します。そのことによって、地域に根差した雇用システムの構築を目指しました。

3点目の目的は、「地域の特性を生かした共生社会の実現」が挙げられます。スイーツに上京区の歴史と絡めたストーリーを付加し、上京区内の方々にスイーツを通して自分たちの住む土地にさらに親近感を持ってもらう為の仕掛けづくりを行います。最終的には、社会的弱者を含めた地域の方々が分け隔てなく共生できる社会の実現を目指しました。



Annual Schedule

2016年	4月	講義ガイダンス	焦点を当てる地域の決定
	5月	京のちから訪問	上京区役所訪問 スイーツの開発
	6月	西陣の町家訪問	
	7月	ポスター作成	
	10月	商品の完成	
	11月	福祉施設訪問	試食会
	12月	福祉施設訪問	

2 成果達成度

まず私たちは、自分たちの在学する同志社大学のある上京区という地域に焦点を当てました。そして上京区の名産品である京とうふ藤野さんのお豆腐と本田味噌本店さんのお味噌、京丹波産の米粉を使用した鯉の形をした和風スイーツの開発をしました。鯉の形の理由としましては、「1. 上京区は応仁の乱にゆかりのある地域であり、2017年は応仁の乱勃発から550周年という記念の年であること」、「2. 応仁の乱で西陣と東陣とに分かれて戦った際に東陣（現在の同志社大学周辺）の総大将であった細川勝元が鯉料理に精通していたこと」が上京区の歴史を調査していくなかで分かったため、その2点をスイーツのアイデアにいかしました。開発の結果、スイーツの名前は「東陣のこい人サンド」となりました。「こい」という文字がひらがなであるのは理由があり、東陣に来て、東陣に恋をして、東陣の総大将が鯉料理の大家であった、という3つの思いが込められています。スイーツ開発では、何度も試作を繰り返し、上京区役所のイベントなどに参加をして、試食アンケートも行いました。



さらに、スイーツ開発も行いながら上京区の福祉施設を数か所訪問し、スイーツを製造・販売してくださる施設を探しました。成果としては、私たちの活動に理解はしてくださるものの、製造する設備がないこと、販売ルートの確保が出来ていないという点を指摘され、スイーツの製造・販売に関するお願いは承諾していただけませんでした。そのため、指摘された点を反省点とし、販売ルートの確保にはどうしたらいいのかメンバーで話し合いを行い、今度は特定非営利活動法人京都ほっとはあとセンターさんを訪問することになりました。京都ほっとはあとセンターさんは、京都府と京都市の委託を受け、京都府内の障害者事業所で作られた「ほっとはあと製品」の販売支援はじめ、障害のある人の就労支援に取り組む民間団体です。この団体は障害者事業所で作られた製品を販売する店舗も持っているため、私たちの製品を販売していただけないかとお願いしました。しかし私たちが開発した商品の実績がないために断られてしまいました。それでも、こうして行動していくなかでたくさんさんの学びはあり、私たちは福祉施設を訪問したことで福祉施設の現状認識を深めることができました。福祉施設にいる障がい者の方は、お金が欲しい、居場所が欲しい、様々な理由で施設を利用しています。そんな方々の居場所づくりへの関わり方を学ぶことができました。

3 プロジェクトを通じて



私たちは、地域を活性化させたいという思いを持ったメンバーが集まり、地域の魅力を詰め込んだお菓子の開発と発信に取り組みました。大学の位置する上京区をターゲットにすることはすぐに決定したのですが、何のお菓子にするのか、上京区ほどの魅力を発信するのかと考えなければならない課題は多大でした。正解の存在しない課題に対して、ベストな解決策を考え出そうとする議論は非常に困難でもありました。なかなか意見がまとまらずに、議論が停滞してしまったときには、プロジェクト

を辛く感じてしまう時期すら存在します。しかし、何としてもお菓子を完成させたいという全員の思いから、投げ出すことなく情報を集めなおすことで困難も乗り越えることができました。振り返ってみると、メンバーで議論し続けたことによって、お菓子が完成する成果につながったのだと思います。他では得ることのできない素晴らしい経験となりました。



編集後記

このプロジェクト科目では、普通の大学生活では知ることのできない福祉施設の現状や商品開発を体験することができました。自発的に行動することで、座学では学ぶことが出来ないこと多く学ぶことができ、この一年でたくさんの貴重な体験がたくさんできました。学部や学年の違う13人のメンバーと、石井先生、井上先生、TAの定森さんとこのプロジェクトに携われたことは大学生活の素敵な財産です。ありがとうございました。

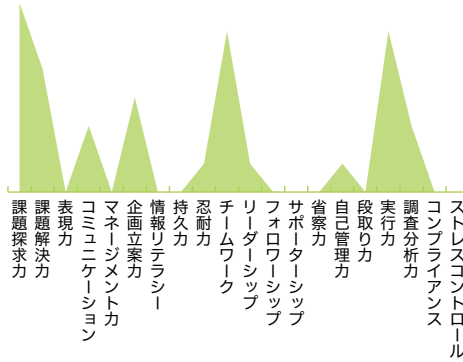
プロジェクトメンバー

岩村 優希(文3) 久保 由季奈(文3) 田島 侑佳(文3) 岩井 皓司(法2) 福本 雄基(法3) 相崎 聖太(商3)
藤井 悠太(商3) 樋之内 正隆(商3) 稲場 琢哉(商3) 前田 法子(商4) 西村 祐馬(政策2) 窪田 結(政策3)
田村 将士(グローバル地域文化3) 定森 博之(TA)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

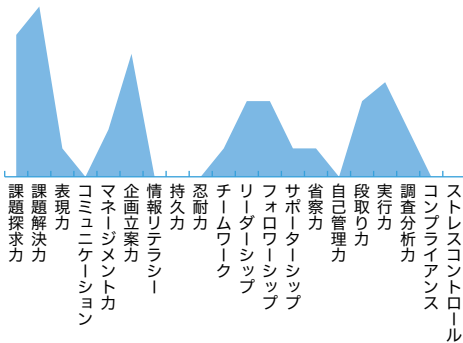
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

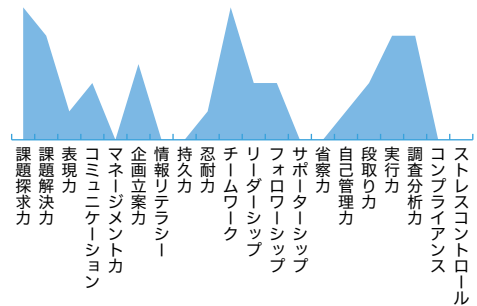


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

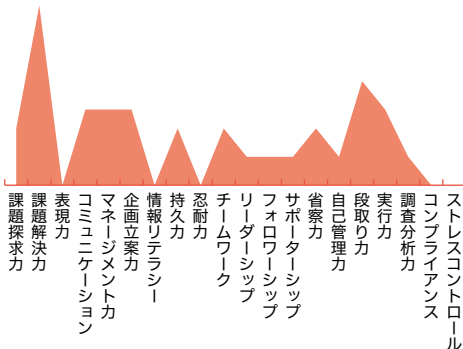


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい

